

## 学校経営推進費 評価報告書（1年目）

標記について、下記のとおり提出します。

## 1. 事業計画の概要

実施課程名	全日制の課程（高槻支援）
取り組む課題	生徒の自立支援
評価指標	学校教育自己診断アンケートの満足度の向上。 学校生活における、児童生徒・保護者の満足度の向上（運動や肥満についてのアンケート）。 卒業後の進路先への定着率の向上。
計画名	～TOPP～高槻からオリンピック選手を～ 高槻オリンピック・パラリンピックプロジェクト

## 2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	卒業後の支援のある自立生活をめざしたキャリア教育の推進。 ①小学部の段階から、障がいの特性や発達段階に応じてキャリア教育の推進を図る。 ②基礎的な体力の向上と豊かな心を育むための児童生徒の活動内容を追究する。 ア 運動や遊びを通じて基礎的な技能を獲得し体力を向上させる。 イ 肥満予防の観点から食育を推進する。
事業目標	①まず本校の立地条件として、鉄道に挟まれ、住宅街に立地していることから、気軽に校外に出かけることが難しい。さらには一昨年には、創立50周年を迎え、校内環境も既存の遊具や用具も老朽化している。この中で、子どもたちの運動の量的・質的な不足を通常の授業だけでカバーすることにかかなりの困難さを感じている。 ②知的障がい者の体力レベルは健常者と比較して40～60%レベル、青年期の知的障がい者の体力レベルは健常者の60%レベルとされている。（個々の能力には差があるが）また、若年時からの低体力が、青年期からの作業成績と加齢の影響について関連していることも示唆されている。さらには、「身体機能と体力」と「職業能力」との関係があるとされている。 ③知的や、発達の遅れのある子どもは上手くからだを使いこなせないことで、友だちとの関わり方や、人との距離感を上手く保てない子どもがたくさんいる。キャリア教育が問われる昨今において、こうした子どもたちの「人との関わり方」や「運動の仕方」「からだの操作の仕方」「様々な運動体験による成長・発達」に視点を置いて本事業に取り組むたいと考えている。 ④本事業を立ち上げることで、子どもたちが主体的に安心して気軽に活動できる環境を整え、計画的な教育活動を進めていくことで、運動不足を解消する取組みを通して「からだづくり」を図り、「肥満防止」「生きる力」のベースとなる心身を育み、子どもたちの生涯のキャリア発達を支える基盤ができるようにしたいと考えている。 ⑤幼少期からの「からだづくり」についての必要性を我々教員がもう一度考え、子どもたちに自己実現や自己肯定感を持つことができるように計画を進めていきたいと考えている。
整備した 設備・物品(数量)	大型遊具（肋木、梯子、クライミングウォール、ロープ、踊り場など）
取組みの 主担・実施者	主担者：体育科教員 実施者：全校教職員
本年度の 取組内容	7月：工事担当業者と打ち合わせ 8月：工事着工 9月：大型遊具を設置。本校職員に向けて説明。児童生徒が大型遊具の使用を開始 10月：授業（小学部：からだ、中学部：体育・チャレンジ）を通して、「からだづくり」を実施 12月：学校教育自己診断を実施 3月：独自のアンケート（肥満や運動について）を実施
成果の検証方法 と評価指標	①独自のアンケート（肥満や運動について）を作成し、実施する。（子ども・保護者向けに実施） ②学校教育自己診断による評価満足度の向上（75%）
自己評価	①独自のアンケート（子どもの意見も参考にし保護者が回答）を実施し、全校児童生徒（卒業学年を除く）の221名中137名から回答を得た。（回収率：62.0%） 設問A：「子どもにとって運動は大切だと思う」において肯定的回答が100% 設問B：「子どもにはもう少しを運動してもらいたい」において肯定的回答が89.7% 以上から、保護者の運動に対するニーズが高いことがわかった。 設問C：「新しい遊具は子どもが興味を持って活動できる設備だと思う」において肯定的評価が74%、「わからない」が18% 設問D：「新しい遊具は子どもの運動能力向上に向いている」において肯定的評価が72%、「わからない」が20% 以上から、新しい遊具の有効性が確認できた。一方で「分からない」という回答も約20%あった。（○） ②学校教育自己診断の設問「子どもが楽しむ・運動するための環境整備ができています」に対する保護者の肯定的評価が87.8%、教員の肯定的評価が82.7%であった。（○）
次年度に向けて	・独自のアンケートでは、設問CとDで「わからない」との回答が約20%あった。これは、遊具に対する保護者の認知度が低いことが原因として考えられる。学年だよりや学校新聞等を通して認知度を高めていく。 ・学校教育自己診断結果は、今年度目標としていた肯定的評価75%を上回った。次年度も目標としている肯定的評価（2年目：80%）を達成できるよう、引き続き教職員全体で遊具の活用を広げていく。今後は、大型遊具だけでなく、他の遊具や運動器具などと組み合わせることで、サーキットトレーニング的な要素も取り入れ、若年時からの体力の低下を防ぎ、子どもの身体能力の向上に繋げていく。 ・地域にも、大型遊具の存在をHP等で発信し、3年目の目標である「大型遊具を活用した交流」につなげていく。